

宮城県仙台市

かわむらこどもクリニック

KAWAMURA CHILDREN'S CLINIC

15万件のアクセス数を誇る小児科ホームページを運営



▲ 川村 和久 院長

かわむらこどもクリニック(仙台市青葉区)の開業は平成5年(1993年)。院長の川村和久先生は、杏林大学医学部卒業後、国立小児病院、仙台赤十字病院、日立製作所日立総合病院等の新生児科に勤務。新生児・未熟児医療の臨床専門医としての十数年のキャリアの中で、数多くの実績を残されてきた。一方、現在運営中のホームページには15万件ものアクセス数があり、「インターネットで最も活躍する医師」としても名高い。今回はそのホームページ隆盛の秘訣をお話いただいた。

HPは求める人に 情報を発信するための手段

川村先生がホームページ(HP)を開設されたのは、平成8年1月のことである。まだウェブサイトの数も多くなく、個人医院としてのホームページも当然のことながら少なかった。そんな時に、スタートを決意した理由は何だったのだろうか。

「クリニックの開院当時から『かわむらこどもクリニックNEWS』という新聞をパソコンで編集して毎月発行していました。子供の発熱時の対処方法、ある

いは、熱とはどんなふうに考えたらいいのかなど、育児に必要な医療知識を中心に紙面を作っていました」

患者のカルテにもこの新聞を手渡して

▼ 診療は月～土曜日(木曜午後休診)。受付・待合室は広々としたスペース。



▶ 育児サークル「お母さんクラブ」。クリスマス・パーティーなどのイベントの他、定期的に講習会・勉強会も開催されている。



いるかどうかを記入していたのであるが、ある時、

「その新聞を渡していたお母さんに、患児の病気の説明をしている時です。『新聞にもこのことは書いてありましたよね』と尋ねると、おかあさんはキョトンとしているのです。実は、新聞はまったく読んでおらず、既にごみ箱の中だったんです」

インターネットに出会ったのはそのころである。

「HPでの情報発信というのは、必要な人、あるいは、求める人にしか、その情報は届かない。逆にいうと、情報を求めている人にのみ発信できる。このメディアなら今まで僕がそれなりの努力を続けてきたことが、活かせるのではないかと考えたのです」

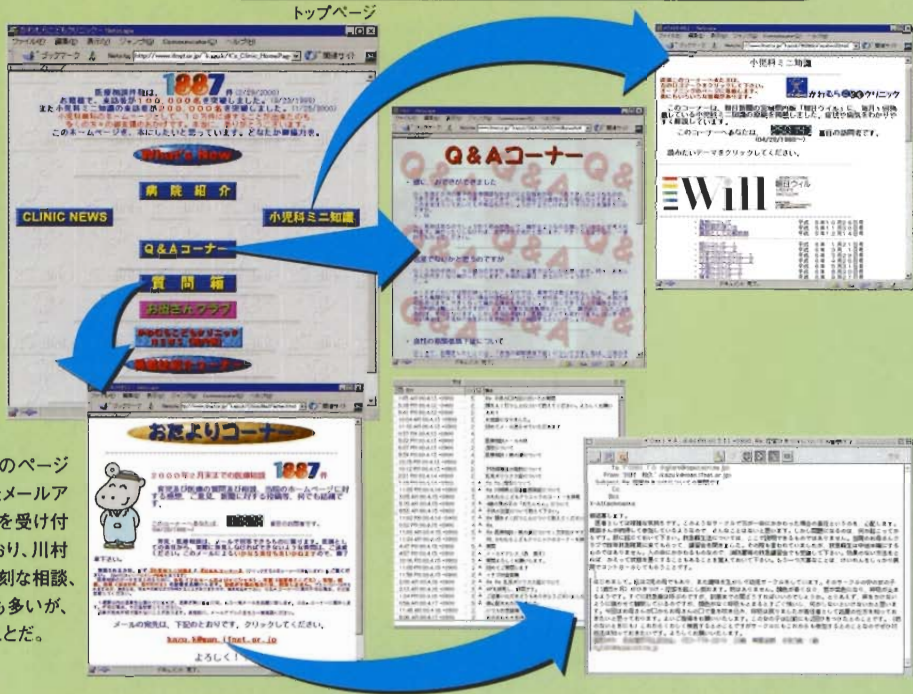
もう一つ、クリニックとして大学病院や総合病院にも負けない何かを作り出したい、というのが高い動機付けの一つだった。

「僕の診療理念は『母親の心配と不安の解消』です。設備や人的組織で大きな病院にはかなうはずがありません。大学病院、総合病院、開業医の順にランク付けされることは致し方ないとしても、それって医者や医者のランク付けかということですよ。決してそうじゃない。開業医であっても負けてはいないぞ、っていう意地みたいなものも、このHPを立ち上げる大きなきっかけとなっています」

HPは開設しても中身の濃いコンテンツを持たなければ、多くの人が目にする機会には恵まれない。川村先生は、そのことに当初から気づいていた。分かりやすいQ&A、小児科ミニ知識、それと40編にのぼる朝日新聞(宮城県内版)での連載の再掲が、HPの核となった。その内容の充実さで医療関連サイトとしてはアクセス数が飛躍的に増えていったのだ。

「僕の見えないところで、うちのHPがどんどん有名になっていく。インターネット雑誌の紹介コーナーには『インターネットの医療相談で有名な川村先生のホームページ』と紹介されているんです。僕には、有名になっているという自覚はまったくありませんから、何だか気恥ずかしい」

かわむらこどもクリニック・ホームページ (<http://www.ifnet.or.jp/~kazu.k/>)。トップページには豊富なコンテンツが用意されている。各バナーをクリックすると、小児医療に関する情報が満載。「母親の不安と心配の解消」のためにとても役立つ。「DIME」「日経ヘルス」などの雑誌・書籍の他、TV情報番組でも度々紹介され、日本で最もアクティブな小児科ホームページとして知られる。全体で200ページを越え、一度のアクセスではとてもすべてを見ることはできない。



「質問箱」バナーをクリックすると医療相談のページ（おたよりコーナー）にジャンプ。表記されたメールアドレス(kazu.k@man.ifnet.or.jp)で相談を受け付けている。受信メールは2000通を越えており、川村先生はすべてに返信されている。中には深刻な相談、あるいはセカンド・オピニオンを求める人も多いが、回答には「慎重に慎重を期している」とのことだ。

とはいえ、ここまで名前が知れると、お母さんたちに与える影響は大きい。

●2000通を越えた医療相談●

かわむらこどもクリニックHPが隆盛を誇るもう一つの要因が、「医療相談」コーナーの設置である。川村先生は、Eメールで世界中のお母さんたちから、医療に関する相談を受け付けている。

「僕が実際にやっているのは、病気に対する直接的な答えを出す本来の意味の医療相談ではありません。会ったことも話したこともない人、まして詳しい症状も診ることができない人に対して、病気やその治療法を判断することなどできるはずありません。平たく言えば、お母さんたちの愚痴を聞いてあげているだけだといえるでしょう。そのことによって、お母さんたちの心が軽くなればそれでいいんです」

月に100通もの医療相談メールが届く。原則としてすべてのメールに返信を書く。1通あたり20分くらいかかるというから、その労力は並大抵ではない。もちろん今の医療システムのなかでは、これはボランティアとしてしかありえない。HPの接続料などの運営実費は、すべて持ち出しである。

「月30時間もこれに費やす意味というのは、果してどこにあるのか、と自問しながらも、毎日しつこく返事を書いている。でもこれが大きな病院では絶対にできないこと。これが僕のポリシーなんです」

「こんなことがありました。育児サークルを主宰しているお母さんからのメールでした。そのサークルのなかにひきつけを起こす子が来ていた。ある日、その子が突然倒れ、呼吸が止まってしまった。そん

なことがあり、僕のところに、その対処として救急蘇生法を教えてほしいと相談が寄せられました。しかし、救急蘇生法は、メールのやりとりでマスターできるほど簡単なものではありません。万一その子が命を落とすことになったらたいへんです。本当に習いたいのなら、消防署などの講習を受けて、しっかりと技術を身につける必要があります。そのような主旨の返信をしました」

そして数日後、そのお母さんから、再度、メールが届いた。そこには、

「先生からのお返事で大切なことに気づかせていただきました。私は今まで『感情豊かな子供に 子供の能力を伸ばしてあげましょう のびのび育て!』そんなことばかり考えていました。でも、もっと大切なことは『命』なんです。今まで当たり前すぎて見過ごしていました」

と記されていた。学会や研究会で親しい医師から、「たいへんだからやめたら。身体を壊しますよ」と、助言されることも度々あるという。しかし、「このようなお母さんたちのお役に少しでも立てるのなら、ここで終わることはできない」

と川村先生。面白くてためになるHPは、今後ますます栄えていくに違いない。 PA



▲所在地は仙台市青葉区。JR仙山線・東照宮駅徒歩5分。JR仙台駅から車で約10分。